

書 評

デビッド・W・エジントン著 香川貴志・久保倫子共訳：『よみがえる神戸 危機と復興契機の地理的不均衡』海青社，2014年1月刊，349p.，3,600円（税別）

本書は2010年にUBC Pressより出版されたReconstructing KOBE：The Geography of Crisis and Opportunityの邦訳版である。

著者であるデビッド・W・エジントン氏はブリティッシュコロンビア大学地理学部在籍の経済地理学者であり，日本を中心とする環太平洋地域の都市研究を専門としている。また，同大学の日本研究所長を歴任しているように，カナダ国内でも指折りの日本研究者でもある。

本書のテーマは1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災からの復興過程である。発災当時，著者は在外研究で京都に滞在しており，その衝撃的な地震動とその後の社会的混乱を経験している。著者の強烈な被災体験と訪れるたびに復興を遂げていく被災地の姿が，本書を著する発端となっていることは想像に難くない。

阪神・淡路大震災は日本の災害史はもちろん社会史においても重要な意味を持つ事件である。しかしながら，本書の共訳者である香川（2011）によれば，阪神・淡路大震災に関する日本の地理学研究者による英文論考が少ないとされる。その点からいえば，実際に震災を経験し，その復興過程を追いかけてきた著者による地理学的論考が海外で出版されている意義は大きい。

加えて，本書は著者の約10年にわたる長期調査の成果である。著者も述べているように，阪神・淡路大震災に関わる英語圏の研究は工学的研究を中心に災害初期期や災害応急期を対象とした

ものが多く，復旧・復興期までを通観した長期的研究が少ない。また，復旧・復興期の研究であっても，特定の一時期を切り取ったものが多い。震災直後の凄惨な被害状況だけではなく，そこからの復旧・復興過程を丹念なフィールドワークによって検証した本書は，たとえ英語圏の研究でなくとも重要な成果であろう。

本書の目的は1995年から2005年にかけて立案・実施された兵庫県神戸市の復興計画の展開を振り返り，これを評価することにある。なお，研究対象が復興計画の中でも土地区画整理事業や市街地再開発事業の展開に絞られているように，著者の関心は「個人レベルではなく総体として近隣地区や都市を見据えた復興の影響」に限定されている。つまり，被災者支援の展開などの個人レベルの生活復興については，本書中にほとんど触れられていない。より一般的に言えば，本書は危機的状況からの都市再生に関わる計画とその応用に関心を置くものと言えよう。よって，本書で取り上げられる主体は日本政府，兵庫県，神戸市，そして神戸市内の地域コミュニティなど，復興計画の立案と実行にかかるステークホルダーである。

第1章「序論」では，著者の関心の詳細とこれに対する結論が簡潔に示されており，第2章以下の本論が要約される内容となっている。まず，著者の関心は，10年にわたる神戸市の復興計画の展開が危機的状況の緩和と都市環境の改善にどのように貢献したのか，そして，その展開に地理的不均衡が生じたのか否か，を問うことにある。続いて，この問いに対する簡潔な結論が示される。阪神・淡路大震災は神戸市に危機的状況の緩和と都市環境の改善とに貢献する大胆な復興計画を展開させる契機をもたらした。しかしながら，復興

計画の立案と展開は複雑かつ論争を伴うものであり、結果として、復興計画は市内で一様に展開せず、地理的不均衡を生じるものであった。これが本書の簡潔な結論である。

「地理的不均衡」については、本書の副題となっているように、本書のキーワードである。著者によれば、神戸市における復興計画の立案・実施は、二つの「地理的不均衡」の影響を受けている。すなわち、「危機の地理的不均衡」と「復興契機の地理的不均衡」である。前者は神戸市における従前の社会経済的な地域構造が被災度合の地域的偏在に繋がっており、これがその後の住宅復興や産業復興の進捗にも影響を及ぼすことで、復興計画の地域的応用に地域的不均衡が生じたことを説明するものである。後者については、先述したとおり、震災は神戸市に野心的な都市再生計画を実行させるまたとない契機をもたらしたが、法制度上の制限、日本政府、兵庫県そして地域コミュニティとの関係が複雑に絡みあうことで、復興計画の地域的応用に地域的不均衡が生じたことを説明するものである。災害研究のキーワードでいえば、前者は脆弱性 (*vulnerability*) の議論、後者は復元力 (*resilience*) の議論に対応するものと理解できよう。

そして、これらの地理的不均衡が生じた要因として、神戸市の震災前の状況、災害の地理的不均衡、トップダウン型で柔軟性に欠ける日本の計画立案機構、そして地域コミュニティの対応の4点が挙げられる。第2章以下の本論において、この4点が詳細に検討されている。以下、本論を簡単に概説する。

第2章「地震と都市復興」では被災後の都市復興に関わる研究課題が整理され、先に挙げた4点が本書の研究枠組みとして導出される。また、日本の都市計画に関わる諸制度やステークホルダーが災害復興に対して柔軟性に欠ける点も同時に指

摘される。この都市計画とこれに関わるステークホルダーに関する議論は第4章と第5章で詳述される。

第3章「神戸と阪神地震」は震災前の神戸市内における自然的・社会的差異が、災害の地理的不均衡として立ち現われることを明らかにする。具体的には、中心市街地周辺の住工混在地域と郊外地域とでは、前者の被災度合が深刻であり、さらに市内西部の住工混在地と市内東部の住宅地とでは、前者の早期住宅復旧が困難であったという地理的不均衡が示される。

第4章「復興計画と復興への対応」では、日本政府の特別立法による復旧支援や神戸市の復興計画である重点復興地域における土地区画整理事業や市街地再開発事業の特徴が詳述される。著者は政府対応については一定の評価を下しているものの、神戸市の復興計画に係る地域指定に関しては、多くの住民が公的経済援助を受けられない結果となったことから、その成果について懐疑的である。本書のキーワードである「復興契機の地理的不均衡」を引きつけて考えると、日本の柔軟性に欠ける都市計画とそれを実行する神戸市自身によって、図らずも復興に関わる地理的不均衡が生まれてしまったといえよう。

第5章「反対運動、住民参加、そしてフェニックス計画」は神戸市復興計画に対する住民の反対運動を詳述し、復興計画の問題点を明らかにした。災害を契機に震災以前から温められていた都市再開発を進めようとする神戸市とその性急な決定に反対する住民との間に軋轢が発生していたが、中間組織としてまちづくり協議会や地元建築家を挟むことで、両者の妥協点を探りながら復興計画が実行されるようになる経緯が記述される。

第6章と第7章ではこれまでの議論が事例地域において検証されている。第6章は神戸市新長田地区と森南地区における復興計画の応用について

検討したものである。両地区ともに重点復興地域に指定されているものの、それぞれの地区が置かれた状況によって、計画受容のプロセスと結果に差異が現れたことが示されている。第7章では神戸市の経済復興を主眼とするケミカルシューズ製造業の復興などの「象徴的事業」について説明されている。いずれも震災を契機とした挑戦的な事業であったが、日本全体の低成長も相まって、神戸市全体の経済回復に貢献するとは言い難い事業であったと評価されている。

本書の結論である第8章「結論」では、第1章「序論」で述べられた結論が詳述されるとともに、神戸の復興10年から得られる日本や世界の都市に対する教訓が述べられている。日本の都市に対する教訓として、神戸市復興計画の性急さを踏まえ、災害復興計画に対するコミュニティの事前了解の必要性が強調されている。これは近年国内で強調されている事前復興計画の議論と共鳴するものであろう。また、世界の諸都市に対する教訓として、すべての災害は「局所的」であることや日本の都市計画の特殊性を踏まえて安易な一般化に警鐘を鳴らす一方、政府の迅速な対応などを復興対応の一つのモデルとして評価をしている。

以上、10年にわたる復興計画の展開を軸に神戸市の復興過程を追いかけた本書であるが、その結語は「(神戸市の経験が) 次の地震が来るまで認識されないだろうし、そうした危機が精査されることもないだろう」という著者の諦めにも似た独白で終わっている。天災は忘れたころにやってくる、というが、本書は来るべき災害とその復興に対する想像力を読者に喚起させるという点で非常に有用であろう。ぜひ一読されたい。

最後に本書に関する3点の課題を指摘しておきたい。1点目は内容に関わる課題である。本書では阪神・淡路大震災復興基金の役割について概説以上の分析がなされていない。被災者生活再建支

援法が立法されていなかった当時において、災害復興基金は被災者の生活再建に資する制度として多に機能した。その被災者の中には著者が言うところの「公的な経済援助がないまま自力での再建を余儀なくされた」ホワイトゾーンに住まう住民も含まれている。本書が個人レベルの生活復興を対象としていないことを承知しているものの、災害復興基金は本書で取り扱った計画論的復興から零れ落ちる多くの人々、いわば復興の地理的不均衡により不利な立場に置かれた多くの人々を救っている。その点を考慮すれば、災害復興基金について詳細な分析がなされていない点に物足りなさを覚える。

2点目は調査方法に関わる課題である。本書の主な調査手法は関係者によるインタビュー調査とされているものの、全般にわたり二次資料や既往論文の分析や引用が中心である。日本語によるインタビューが中心であったことから致し方ないことかもしれないが、インタビュー調査の結果が十分に活用されていない印象を受ける。また、インタビュー調査が中心だとしても、適切なインタビュー対象者が選択されているのかどうか判断できない。インタビュー対象者の簡単なプロフィールを記したインタビューリストを付するなど、読者を納得させる補足的説明が必要であろう。

3点目は邦訳に関わる課題である。まず、多くの二次資料が参考文献として挙げられているが、日本語で公表されているものについては、原題(邦題)で挙げたほうが読者の便にかなうと考えられる。加えて、日本語訳がやや硬いため、一読して理解できない文や用語が散見される。例えば、本書中で繰り返される「阪神地震」は一般的な呼称ではない。また、本書中で重要な役割を担っている「都市計画家」については、主に神戸市の都市計画セクターに属する職員を指しているものと理解されるが、より馴染みのある言葉を選

択してほしかった。

いずれも本書を著し、訳出する努力を考えれば些末な課題である。現在、著者は東日本大震災の被災地を調査しているという。神戸市の長期的復興を踏まえた著者の新鮮な知見に期待したい。

文 献

香川貴志 (2011) : David W. E. "Reconstructing Kobe: The Geography of Crisis and Opportunity". 人文地理, 63, 556-557. (文献解題)

(渡邊敬逸)

中村周作著：『酒と肴の文化地理 大分の地域食をめぐる旅』原書房。2014年4月刊, 179p., 1,800円 (税別)

本書は、失われつつある各地の伝統魚介類食と、地域に根ざしてきた酒を記録し、その地域性を明らかにするとともに、それらの地域活性化への活用を提案したものである。著者はすでに宮崎県域（中村2009a）と熊本県域（中村2012）を対象として同様の著作を発表しており、大分県域を対象とした本書が第三弾という位置づけである。評者は大分県出身であるため、学会の書籍ブースで本書を知り、迷わず購入した次第である。

本書の構成は以下のようなものである。

第1章 序論

第2章 大分県域における飲酒志向の地域的展開

第3章 伝統的魚介類食を育ててきた大分県水産業

第4章 大分県域における伝統的魚介類食の分布展開－住民アンケート調査の成果－

第5章 伝統的魚介類食にみる大分県の地域性

第6章 酒と肴 地域・飲食文化を堪能する旅

－ドリンク&イートツーリズム構想－

では構成に沿って内容を紹介しよう。

第1章では、伝統的飲食文化が消失の危機に瀕していることがまず述べられ、それを記録すること、そして地域活性化の核として今日の利用を考えることが必要であると訴えている。また一般読者向けに文化地理学における飲食文化研究の動向を紹介し、地域における文化の面的広がりを明らかにできる点が地理学の利点であるとし、本書の目的を説明している。

第2章は、大分県域における飲酒嗜好の地域差とその形成過程を論じている。そのための資料として、税務署管内ごとの酒類別消費割合のデータを用いるのは一般的であろうが、特筆すべきは県内全市町村の小売酒販店84店への聞き取り調査を実施して、より詳細な地域差を把握しようとした点にある。大分県内では元々ほぼ全域で清酒が好まれていたが、1970年代半ばからのムギ焼酎ブームによってシェアが高まったことから、「清酒+ムギ焼酎」が大分県の基本的なパターンであるとする。飲酒嗜好に基づく等質的地域区分を行うと、このパターンに加えて、都市部では嗜好が多様になること、県周辺部では隣県からの影響を受けて多様なパターンが存在すること（清酒+ムギ焼酎を基本としつつも、佐伯ではイモ焼酎とコメ焼酎、竹田ではコメ焼酎、日田では25度ムギ・イモ焼酎が加わる）などの結果を得ている。さらにこれらのパターンが形成される過程を、11の形成要因に整理してわかりやすくまとめている。

第3章は、大分県の水産業の地域的展開を述べている。大分の魚といえば関サバ、関アジのような高級魚の知名度が高いが、海域ごとに明瞭な特徴を持っている。遠浅の瀬戸内側ではノリ養殖、採貝、底引き網漁、クルマエビ養殖などが展開し、リアス式海岸の豊後水道では関サバ・関アジ釣、マグロ遠洋漁業、旋網によるイワシ、アジ、サバ

漁、ブリ類養殖などが盛んであることが説明される。この章は、続く第4・5章の伝統的魚介類食の分析の導入部分と位置づけられる。

第4章と第5章は、伝統的魚介類食の地域性を明らかにするもので、本書の中核部をなしている。まず、文献研究などから県内の71品目を伝統的魚介料理として抽出したうえで調査票を作成し、県内58市町村（平成の大合併前）に対して世帯数で按分した件数の聞き取りアンケート調査を実施し、488名の回答を得ている。この調査結果から、第4章では伝統的魚介料理の摂食頻度分布図を71枚作成し、どこでどの料理がどの程度食されているかが説明されている。評者は恥ずかしながら半分以上の料理を食したことがなかった。評者の母は料理好きなので郷土料理を比較的口にしている方だと思っていたが、伝統的魚介食がそれほど絶滅の危機に瀕していることであろうか。

続く第5章は、このデータを用いて、伝統的魚介料理の摂食パターンからみた地域性を明らかにしている。まず摂食頻度の地域的パターンの類似性に基づいて魚介料理を類型化した結果、大分類として4、小分類として11の類型を得ている。特徴的なもののみ紹介すると、「すり身揚げ」や「りゅうきゅう（タレに漬けた刺身を載せた魚丼）」などは全県的によく食される「凡県域摂食型」。「クロメ（佐賀産の海藻）」は沿岸地域と山間地域の双方で好まれる「沿岸・内陸広域摂食型」。「ホゴ（カサゴ）の吸い物」は沿岸地域で主に食される「沿岸広域摂食型」。「ごまだし（炭火焼きした魚身とゴマを摺って味付けしたもの）」は「県南部地域摂食型」などとなる。このような分布パターンが形成される理由として、凡県域型はポピュラーで保存が利く食材が利用されていること、沿岸部では魚介の生食が一般的で手の込んだ伝統食が比較的少ないこと、内陸部では、県内

沿岸から食材が持ち込まれるものの他、隣県から持ち込まれる食材を利用するものも多いことなどが挙げられている。このあたりの考察には、著者の水産物行商研究の成果（中村2009b）が活かされており、興味深い。

第6章は、酒と肴を地域資源とみなし、それらをめぐる体験型観光コースを三つ提案している。これは地理学徒には馴染み深い「巡検」そのものである。各コースには酒蔵、魚市場や漁協直営の売店・レストラン、自然環境や生活文化など多様な見所が含まれた魅力的な内容となっている。著者は普段から学生を度々巡検に連れ出しているのだろう。地理教育者としての優れた力量を垣間みることができる。

このように本書の魅力は数多いが、地理学書としてみた特長としては、第1に、徹底した現地調査によって地域事象（飲酒嗜好と伝統的魚介料理）の分布を捉え、地理学が伝統的に培ってきた手法を動員し、大分県の地域性を見事に明らかにした点にある。地理学の基本概念を初学者に説明する上で格好の教材ともなるだろう。難解な理論を振りかざさなくとも優れた成果を挙げることができるという好例である。第2には、地域の魅力を地理学の立場から鮮明にすることで、一般読者に対して地理学的アプローチの魅力を啓蒙することに成功している点にある。本書を携えて、旅に出かけたくなる書物になっている。第3は、地理学教育の成果をしっかりと示した点にある。この調査のために著者は公用車で約1万2千キロを走破したそうである。「あとがき」には調査に同行した学生一人一人の感想が掲載されており、各自が苦心しつつ成長を遂げた様子がよく分かる。フィールドワークに基づく地道な研究・教育の実践がここに見事に結実したといえる。

その一方で、いくつか気になったこともある。第1に、住民アンケートの回答数が、最も少ない

市町村で4件というのは、調査の困難さを承知の上ではあるが、学術的著作としてはやや信頼性に欠けるように思う。実際に、いくつかの町村では近隣地域に比べて特異な結果が出ており、回答の偏りが感じられた。第2に、隣県の飲食文化がどの程度大分県に影響を及ぼしているかを踏み込んで議論してほしい。すでに宮崎・熊本両県で詳細な調査結果を得ているのであるから、両県の代表的な料理を大分県内でも調査項目に加えることによって、文化浸透の検討が可能であったと思われる。第3に、出版事情の制約もあったと推察するが、魚介料理をカラー写真で紹介し、調理法をより詳しく説明すると、その魅力をいっそう効果的に伝えられたであろう。旅に携えたいくなる書物という点で言えば、新書サイズでもよかったかもしれない。こうした点を感じはしたが、本書の意義が損なわれる訳ではない。

著者は今後さらに九州各県での調査に意欲を示している。それらをふまえて九州から本州へ、また南西諸島へ、さらにアジア大陸へと視野を広げ、壮大なスケールでの飲食文化の地理学が打ち立てられそうな予感がする。続編を楽しみに待ちたい。

なお表と裏のカバーに描かれている鮮やかなイラストは、前二作と同様、著者のご子息によるものだろう。こちらもぜひ注目してほしい。

文 献

- 中村周作 (2009a) : 『宮崎だれやみ論—酒と肴の文化地理—』 鈺脈社。
 中村周作 (2009b) : 『行商研究—移動就業行動の地理学—』 海青社。
 中村周作 (2012) : 『熊本酒と肴の文化地理—文化を核とする地域おこしへの提言—』 熊本出版文化会館。

(鹿嶋 洋)

横山昭市著：『国際関係の政治地理学—現代の地政学—』 古今書院. 2014年9月刊, 155p., 3,500円 (税別)

地理学徒にとって地図はもっとも基本的なツールである。分析対象とする人間活動や環境条件をいかに地図に落とし込むか、空間的思考の表現形式として地図にまさるものはない。地図 (表現) が有する政治性については、これまで幾多の効用と議論が蓄積されてきたが、日本を中心とする国際関係をめぐる議論のなかで、こうした地図のもつ政治性が発揮される場面は多いとはいえない。周知のように著者は『政治地理学』(ジャクソンとの共著) や『コール・世界情勢を読む』の訳者として日本における政治地理学・地政学の泰斗であると同時に、ヨーロッパ、アジア、アメリカ・カナダ地域研究、中四国や愛媛県の地域研究、都市・交通研究、地域開発や地域発展にかかわる膨大な研究業績を挙げて来た、まさに日本の人文地理学における「レジェンド」たる存在である。こういった前振りではまる書評はたいいていの場合、提灯記事のそしりを免れないが、もしそういった印象を与えるならばまったくもって評者の不徳のいたすところである。本書は、現代社会における地図活用や地図認識の国際比較、地図表現の思想に関わる研究に長く携わって来た著者による、国家や国際関係に関わる近年の研究集成である。

前置きが長くなった。ここで本書の内容を章構成にしたがって紹介したい。本書は第1部を総論、第2部を各論、第3部を補論とする3部7章から構成される。第1部総論は、地理学における空間認知に関する地図表現において、アジアやヨーロッパでの国際関係の影響という視点から、第二次世界大戦後の東アジア、北東アジアとインド洋地域、EU等各地域が描かれた地図を論じた第1章と地政学思想史を論じた第2章から構成される。第

1章「現代国際関係の地図表現－アジア・ヨーロッパを主に－」では、8枚の主題図、例えば、旧ソ連の東アジア地域への進出を示した地図（1953年）や中国沿海地域とヒンターランドを示した地図、あるいはEUの発展を概念的に示した地図が分析対象として示される。これらの地図はいずれもその時代の国際情勢を反映して描かれたものであるが、主題図の常として、その作図には位置や方位の偏位、分布、デフォルメの表現様式等、作成者の意図を読み取ることが可能である。著者はこれらの主題図に内包された作図のロジックを解き明かすとともに、日本における政治学や地理学などの出版物において、こうした地図表現が活かされた例が少なく、国際関係を空間的に思考・表現する努力が不十分であることが指摘される。

第2章「地政学的思想の展開とその地図表現－ラッツェルからセヴァスキーを主に－」では、地政学における思想的展開について地図表現を介した考察がされる。本章では19世紀末以降展開した地政学思想について、ラッツェルからハウスフォーファーに至るドイツ地政学やマッキンダーの地政学的地球観、ナチス体制下のファシスト地政学から東西冷戦時代のアメリカ合衆国における地政学の流れが取り上げられる。現代の地政学史においてなお引用される欧米の主要原典から地政学思想の展開がそれぞれの代表的な地図表現をもとに検討されるが、単なる概述にとどまらず、第二次地政学ブームにある日本の地政学界への警句が込められている。

第2部の各論では、EU統合における鉄道網形成の政治的戦略の意義（第3章）やロシアの対東欧・西欧への石油・天然ガス供給の現況と対外政策（第4章）にかかわる地戦略的（geostrategic）な考察、および東シナ海をめぐる日本・韓国・中国・台湾間の漁業面での利害関係（第5章）、さらには海洋国家・シンガポールの政治的・経済的

特性とマラッカ海峡の拠点性と国際性が論じられる（第6章）。

第3章「EU統合政策における鉄道網の戦略的意義」では、西欧・中欧における鉄道の地位と役割の史的状況と変化を述べたうえで、EUにおける鉄道網の整備について、ユーロトンネルや高速鉄道の開設を例に統合政策とその戦略的意義の視点から分析される。地域の組織化としての交通現象（テーフほか、1980）の視点から、各種交通機関のなかでもとりわけ鉄道のもつ政治的意義の重要性が説かれる。鉄道網の発展は国家の歴史や発展過程、政治的環境と密接なかかわりがあることに改めて気づかされる。

第4章「ロシアの対欧石油・ガス供給の地戦略的考察」では、ロシアの資源開発と大国化への推移とこれを背景とする輸出先国構成ならびにパイプライン建設を通して、資源外交の様態が明らかにされる。地戦略論は国家と国民の存立について、軍事力のみならず政治・経済・文化の諸要素による総体的な国力形成の研究であり、国土の自然的・人文的局面的地理的条件へのアプローチが重視されている。国家の地理的環境は地域（隣国）や地球規模でのさまざまな影響のもとに相対的に変化するものであり、昨今のウクライナ情勢をめぐる混迷を予見したかのような考察は見事である。

第5章「東シナ海における海洋境界と以西底曳網漁業の変容」では、東シナ海における漁業活動が周辺諸国による国際的な入会漁場になってきた歴史的経緯および当海域における日本漁業の変化を各国との漁業協定による操業海域の縮小・変化など政治的要因とのかかわりから分析される。この議論もまた、2014年秋に生じた中国船団による小笠原諸島周辺での宝石サンゴ密漁事件の提起する問題を想起させる論考である。

第6章「現代の都市国家シンガポールの発展と

課題」では、21世紀におけるシンガポールの港湾都市としての発展特性をマラッカ海峡・シンガポール海峡とのかかわりから述べるとともに、海賊問題についても言及する。ここで注目されるのはシンガポールの有する地理的位置の優位性、すなわち交通の拠点性である。シンガポールの地政学的特性が今日の発展に大きく寄与したことはよく知られているが、国際海峡としての重要性は同時に海賊による船舶被害という深刻な課題を抱えていることが明らかにされる。

第3部は補論として、第7章「中国の省民性試論」が収められる。中国の多民族国家としての特性が省民性という視座から論じられる。華北、華中、華南と大きく三つの地方における人々の気質がその地域の地理的性格と結びつけて考察される。政治に敏感な北京人や働き者の山東人、足が早い上海人などそれぞれの省民性の描写は興味深い。

以上簡単に本書の内容について紹介を試みたが、本書の特徴として以下の3点を指摘したい。

第一に、日本の政治地理学に与える貢献である。政治地理学は伝統的には「国家の政治地理学」として、領土・領海・国家の形態や形成そして国際関係の歴史的動態と現状を、自然・人文地理的要因から説明してきた（山崎，2013）。日本における戦後の政治地理学は「人間の領域性」や「場所の政治」といった権力の空間利用といった視点からの研究やグローバル化による冷戦後の世界秩序の再編に関する、脱領域化や再領域化といった新たな空間動態に関わる議論、さらには地政学を掲げる知的実践に限らず、世界を記述する「地理学的知」そのものに内在する政治性が強く問題視する議論がなされてきた（山崎，2013；北川，2013）。こうした政治地理学・地政学をめぐる学術的環境の変化のなかで、戦後日本においては「国家の政治地理学」は克服されるよりも忌

避される傾向が強く、国際関係をはじめ領土や国境に関する研究も必ずしも展開されてこなかったことが指摘されている（山崎，2013）。こうした学史の流れのなかで、本書はタイトルが示す通り国際関係の政治地理学について、現代の地政学として提示しようとする試みでありその意義は大きい。本書で取り上げられたテーマはいずれも「古くて新しい」課題であり、交通体系の整備や資源管理と供給システム、領海・領土問題は深く地理的な位相とかかわりを有していることが再確認される。このことは同時に、地理学者による空間的思考が国際関係の舞台でさらに発揮されなければならないという叱咤とも受け取れる。

第二の特徴として、ともすれば抽象的な議論に陥りがちな政治地理学において、地図（主題図）の解釈にこだわり続ける著者のスタイルを指摘したい。本書にはふんだんに地図がもちいられ、それらの地図に込められた意味を解釈しながら議論が展開されている。今や地図のない、（仮にあったとしても）補助的な役割しか持たない地理学の論文は珍しくない。特に政治地理や文化地理の分野ではこうした傾向は顕著である。人文地理学が他の人文・社会科学と伍して発展していくためには、共通する知のプラットフォームとして理論的枠組みの共有が要求されることは必然であるが、その一方で「地図を手離した地理学者」が増えていることも事実であろう。地理学の強みは何であろうか。我々は「歌を忘れたカナリア」になりはしないか。本書は改めて伝統的な地理学の気風を伝えてくれる。

第三の特徴として、本書で取り上げられた素材の面白さと丹念な資料収集に基づく記述の確かさである。既発表論文を一冊の書籍として刊行する場合、どうしても各章のつながりや全体の構成において不統一感が残るのが常であるが、本書の場合、こうしたアンソロジ的な不統一感を感じさ

せない。とくに中国の省民性を扱った7章では、知り合いの中国人を思い出して、「そういえば出身は〇〇省だったな」と首肯することしきりであった。世界の諸地域における国際関係のホットトピックスが扱われる本書は、まさに現代の地政学として学会に貢献するものと思う。

最後になるが、著者の横山昭市氏は評者である私にとって大先輩にあたる。米寿を間近にされた先生が、今なお現役の研究者として活躍されている姿に接すると、嬉しさとともに自分が歩いている地理学の道がはるかに深淵なものであること、そしてそうまでも探求すべき魅力的な学問であることに気づかされる。齢50を過ぎた私が35年後に研究書を上梓することがあるのだろうか。私などが想像もできない境地に立つ著者によるあとがきの末尾には、長年連れ添われている奥さま

への感謝が示されていた。謹厳実直ながら温かみのあるお人柄が偲ばれる文体で。横山氏の今後の益々のご健勝とさらなるご活躍を祈念しつつ、筆をおきたい。

文 献

- 北川真也 (2013): 地理学と地政学. 人文地理学会編『人文地理学事典』丸善, 36 - 37.
 コール, J.P., 横山昭市訳 (1986): 『コール・世界情勢を読む』大明堂.
 ジャクソン, W. A. D. ・横山昭市 (1979): 『政治地理学』大明堂.
 テーフ, E.J., ゴージェ, H.L., 奥野隆史訳 (1980): 『地域交通論—その空間モデル』大明堂.
 山崎孝史 (2013): 政治地理学. 人文地理学会編『人文地理学事典』丸善, 264 - 267.

(松井圭介)